

軍人たちの石油探査

地質相談所

ここは ウルムチ。中国の西部を占める広大な大地 新疆ウィーグル族自治区の区都。阿片戦争の英雄林則徐のかつての配流の地。玉(ぎょく)で知られた古い町。蘭新鉄道の終点。カラマイなどの油田群に囲まれた新しい町。

その郊外の兵舎から 15輦の軍用トラックが暁の冷えた大気を震わせて走り去った。頃は1987年の4月半ば まだ春遠く近くの天山の峰みねは深い雪に閉ざされている。15輦の軍用トラックが目ざすは南はるか タクラマカンの砂漠の人なき荒野である。

この部隊は中国人民解放軍新疆軍区に属する一行で臨時に地質鉱産部西北石油地質局に配属された タリム盆地の「無人区」での石油探査に挑む特別部隊である。これまでも部隊は「無人区」での石油探査にたずさわってきた。今年で足かけ3年になる。この年月 新疆軍区司令部は1高射砲大隊からの具申を承認して兵士と機械を動員し 無人の砂漠で石油の探査に従事させ 彼等の国是である「四つの近代化」の一翼をになってきた。軍隊にたてられている規律 機動力 耐久力 装備が無人の砂漠で効果を発揮するか 新聞「中国地質報」(1987.5.25)は次のように書いている。

「彼らの前面には 交通が閉ざされ 地形の複雑怪奇な 乾ききった 人煙絶えたタリム盆地が横たわり そのような状況のすべてが探査の前に重大な障害として立ちはだかった。彼らが入った地域は 北西石油地質局が国家重点建設計画の一環としてその計画の遂行を引き受けたところである。計画そのものは年の末に決定され 新たな項目の探査事業として展開されつつあるものである。当初はこの計画に対応できる能力と力量に欠け その実施さえおぼつかなかった。このとき 新疆軍区の1高射砲大隊は 提供できる彼等の装備と訓練の成果を基礎に 自発的に人力と設備を利用して一支隊を編成し 西北石油地質局の石油探査隊とともにウルムチを離れ タクラマカン砂漠に入った。この行動を 彼等は「タリムの会戦」と呼んだ。

そして足かけ3年の間 砂漠の往環じつに 10万km余 発破井の掘進およそ1万点 かくして所期の課題が

遂行されていく。「タリムの会戦」に参加した部隊の将校・下士官・兵士はその90%以上が若者である。その彼等は 果てしなく広がる砂の海に兵舎を設営 駐屯することに甘んじている。すでにその中から三等功労章に輝いた者が8名。彼等の姓名 彼等の功績はタリム開発の歴史に永遠に書き留められるに違いない」

何処の国の軍隊でも 例外なく給水専門の部隊を作っている。いわゆる鑿井班で 大抵は工兵隊に所属している。中国では各兵科作戦単位ごとに配置され その最小単位は大隊とされているらしい。それがどれほどの深掘り能力を備えているかは知らないが ポーリングには慣れている。この話は 軍隊のうまい有効利用の例である。かつて筆者は 「いかにして殺されずして 敵を殺すか」と言われもしたし その訓練に明け暮れた経験がある。軍隊は 本来そうしたものらしい。しかし それが「殺し殺され」でなく 石油の探査に熱中するなんて素晴らしいことだ と思う。

かつて 筆者は天山山脈の麓に退役軍人が1ヶ師団を編成して入植し 農地を開拓していった話を本誌(「建設時代の遊撃隊員」第121号)に書き 写真でその苦闘ぶりを紹介したことがある。その師団の名は農第1師 これに農第2師 そして農第3師が続き 今では一つの都会 石河子市が出来上がっている。タリムには石油がある。日本のあるテレビ局が放映したところによると 区域は離れているが すでに新しい油田がタクラマカンで誕生している。もし高射砲大隊の特別部隊が加わったこの探査が成功したら そこに第二の石河子市が生まれることだろう。

中国では 武装警察隊も鉱物資源の探査のために部隊を動かし とくに金鉱の探査で名を馳せている。しかも ただ探すだけでなく 国に売って利潤を上げている。まさか人民解放軍が商売をするようなことはあるまい と思われるかも知れないが 現在すでに人民解放軍空軍部隊が航空会社を設立・運航しているのであるから 高射砲大隊が商売をしたとしても 不思議ではあるまい。そのうち解放軍経営の鉱山が出現するかも知れないのである。中国とは面白い国である。

(文責：岸本文男)